

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第123号

イザヤ 65:1

平成17年12月30日

~~~~~  
 イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。主人は、彼を呼んで行った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』 管理人は、心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、こじきをするのは恥ずかしい。ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか。』と言うと、その人は、『油百バテ。』と言った。すると彼は、「さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって、五十と書きなさい。」と言った。それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか。』と言うと、『小麦百コル。』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい。』と言った。この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで、他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということではできません。」さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられる者は、神の前で憎まれ、きらわれます。 ルカ16:1-15.

ある企業の高級取りの幹部が不正流用、横領などをしているとの内部告発で、不正行為が発覚し、解雇の通知がなされたとします。この世の金力、権力を誇った者が一転して、失職、多額の負債に負われることになったとき、それまでと同じような社会的地位、高収入の職を探すことはまず無理です。もう肉体労働に従事できる年齢でもないし、さりとてこじきをするわけにもいかない、養っていかなければならない家族もあるし、どうしようも、絶望の中で彼は名案を思いつきます。親交のあった大手取引先に電話して、...と現代版に直すとこのような状況設定で、イエスは弟子たちに冒頭に引用した『不正な管理人』のたとえを話されました。

ある金持ちが全信頼を置いて財産管理を任せていた管理人が乱費をしているという訴えに、主人（金持ち）は彼に会計報告の提出を命じ、解雇通告をします。この管理人の乱費の仕方が如何にひどかったかは、ルカ15章の『放蕩息子』のたとえの中の「弟は、...そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった」と同じ表現が用いられていることから想像できます。窮地に陥った管理人が思いついた名案は、解雇後も何とか生き延びる手立てとして、今まだ権威があるうちに主人の債務者たちの借りを軽減した偽造報告書を作っておくことによって、債務者たちに恩を売っておくことでした。地位、職、高収入を失ったあかつきには、多額の負債を免除された債務者たちは自分の尽力、好意を評価して、快く迎え入れてくれるであろうと考えたのでした。もし負債額が減らされれば、債務者たちは恩を着せられることになり、自分に返礼するのが当たり前と、この管理人は、当時の一般的な考え方であった《互惠主義》から知恵を得たのでした。

ここまで語られてイエスは、「この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」と、この抜けめがない管理人の行動とそのやり方に対してご自身の評価を下されました。この管理人を「この世の子ら」として語っておられることから、たとえの主人公は明らかに未信者です。彼の行動は間違っており、見習うべきことではないのですが、来るべき危機に備えて今最善を図る彼の賢さをキリストの弟子たち（光の子ら）は見習うべきなのです。状況を正しく認識し、危機に賢く応答していくことは、管理人に求められる資質なのです。このよう

に、このたとえの焦点は管理人の不正、不忠実な行動の是非にあるのではなく、危機への備えの抜けめなさ、『永遠』への橋掛かりをする賢い姿勢に置かれています。

「この世の富」（邦訳では「不正の富」）で自分のために友を作るということは、「持ち物を売って、施しをなささい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい。そこには、盗人も近寄らず、しみもいためることがありません。」（ルカ 12：33）というイエスの教えに置き換えることができます。すべてのものを友や助けを必要としている者たちすべて（隣人—となりびと—）と分かち合うことができるような富の使い方への奨励が示唆されているのです。文脈から明らかのように、危機が訪れるのは、この世の富がなくなるとき、あるいは、朽ち果てるときで、言い換えれば、神の国の到来によりこの世の価値観がくつがえされるときです。したがって、イエスが語られたのは、この世の人がこの世のことにに関して危機に備えて抜け目なく賢く全対処し、行動に移しているように、キリストに従う者たち、弟子たちも、まだこの世に生がある今、神の国のことにに関して抜け目なく賢く行動に移さなければならぬということでした。弟子たちがこの世の富を今どのように使うかは、永遠の住まいである「神の国」への入国に関わる重大事なのです。

先月号で触れた『貪欲で自分中心な金持ち』のたとえとルカ 12 章の『不忠実なしもべ』のたとえに登場する主人公はともに神の国入国への失格者です。これらのたとえは、「自分のためにたくわえても、神の国に富まない者」、「主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべ」が「持っているものまでも取り上げられる」厳しい裁きの日が、「思いがけない日の思わぬ時間に」訪れることの例でした。ルカ 14 章に記されている『大宴会』のたとえと婚宴での席順の教えに反映されているのは、イエスの地上でのミニストリーがどのようなものであったか、どのような者たちに向けられたかから窺える、神の全人類への愛、慈しみですが、「神の国」への入国は、他人中心の生き方、すなわち、自己を無にし、人に仕えるという形で、この世において自らを神の御前にどのように位置づけているかで、今すでにスタートしているのです。しかし、「あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるからです」と言われる方は、人の心の中の理屈も動機もすべて見抜いておられるので、私利私欲に基づく寛容、この世の関心を引くための雅量、見かけだけの慈善事業が天に宝を積み上げることにならないのは明らかです。そのような人目を引く寛容は確かにこの世で報いを受けますが、他方で、神の国に投資されたものやことの報いは、「義人の復活のときお返しを受ける」という主の約束通り、忍耐の後、神の国で得られるものなのです。

続く 10-13 節で、イエスはさらに、『この世の物質的な富』と『神の国の霊的な富』について、前者を「小さい事」、あるいは「他人のもの」、後者を「大きい事」、あるいは「あなたがたのもの」にたとえて、永遠という高次元の視点から見たら、この世のお金、不動産、所有物はごく小さなものに過ぎず、それらを運用することは「小さい事」ですが、その運用の仕方が忠実であることは、この世にあっても、神の国にあっても大事なことで、要求されていることなのです。今日に見えるこの世のことに忠実であると、心の中のすべてを見通しておられる主によって評価された人は、今は目に見える形で実現していない神の国のことにも忠実であるに違いないと信頼され、実際やがてこの地上に実現する神の国で大きく用いられることになるのです。その反対は、今この世のことに不忠実な人です。そのような人はやはり神の国でも不忠実なので、神の信頼を買うことはできません。ここで、「不正の富」がこの世の目に見える富であるなら、「まことの富」とは、神の国で神から与えられる賜物、すなわち「永遠のいのち」です。神の国が永遠、すなわち、時の次元の外にある『真の世』であるなら、この世は時の枠の中にある過ぎ去り行くつかの間のもの、『仮の世』です。したがって、この仮の世の富は、実際には永遠に所持できる自分のものではなく、「他人のもの」で、神の国に生きる「永遠のいのち」こそ、初めから神がすべての人に与えようと望んでおられる「あなたがたのもの」（私たちのもの）ということなのです。

パウロは、「世の富を用いる者は用いすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。」（コリント人第一 7：31）と警告しましたが、イエスも、この世の富がいつも簡単に人の心を支配し、神に代わって『偶像』になり得る危険をご存知で、「しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。．．．あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」と言われました。『不正な管理人』のたとえに続いてイエスがこのメッセージを語られたのは、しかも弟子たちに向けて語られたのは、このことを即実行に移しなさいということでした。神の国の原則を頭に入れておくというだけでは、まさに二人の主人に仕えるという中途半端な忠誠しか尽くせない状態で、「主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。．．」（申命記 6：4-5）と、神がイスラエルの民にご自分への絶対忠誠を命ぜられたようには、主イエス・キリストを愛し、従っているということにはならないのです。初代エルサレム教会はこれらイエスの教えを忠実に実践し、その結果、キリストを信じる者たちの群れが、「彼らの中には、ひとりも乏しい者がいなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、使徒たちの足元に置き、その金は必要にしたがっておのおのに分け与えられた。」（使徒の働き 4：34-35）と、心と意思を一つにした理想的な共同体であったことを証しています。ギリシャ語「コイノニア」はよく「フェローシップ（仲間、連帯）」と訳され、霊的な交友関係の意で理解されていますが、直訳すると「分かち合うこと」で、霊的だけでなく、物質的にも社会的にも一つになること、すなわち、実際の、実践的な分かち合いが本来意図されたことのようにです。パウロは、コリント人への手紙第二 7、8 章で、この原則を扱っていますが、パウロがお手本にしたのは他でもないキリストご自身のミニストリー、生き方でした。

イエスの群れに混じって「金の好きなパリサイ人たち」もイエスの弟子たちへのメッセージを聞いていましたが、心の中でイエスをあざ笑っていた彼らの姿勢は、神の国から遠く離れたものでした。独善的で、神、神の国を求めるよりも、この世の価値観、評価、賞賛を優先していた宗教家パリサイ人たちは、イエスの評価では、神が信用貸しされた「この世の富」をその所有者である神に忠実に運営するのではなく、私利私欲のために不忠実に用いている者たちであり、人間の間で崇められても、人の心、動機をご覧になる神には、「憎まれ、きらわれ（る）」偽善者なのです。神が信用貸しされる「この世の富」には、各自に与えられている金、財産、権力、能力、性格、人間関係等々、この世で神のご用のために用いられるすべての賜物が包含されるでしょうから、この神の国の原則が適用されない者は一人としていないのです。